



今回は、2 年 7 組 1 班によるスローコーヒーへのフィールドワーク報告をします。

◇スローコーヒー郡上支店を訪問し、フェアトレードについて学びました！

日 時: 2018 年 8 月 17 日(金) 10:00~12:00

訪問先: slow coffee(郡上支部)

内 容: フェアトレードのコーヒー豆について

参加者: 山下穂高 阿部遥斗 須田陽大 木下竜玖 三輪琴音 瀧本彩乃

◇ スローコーヒーの活動

スローコーヒーでは、フェアトレードのコーヒー豆を使用しています。フェアトレードとは産地直送の取引のことであり、現在のコーヒーの流通は、生産者にきちんとした対価が入らない仕組みになっています。それではいいコーヒーが作れません。スローコーヒーは生産者がいいコーヒーを作り続けられるように、フェアトレードで輸入されたコーヒー豆のみを焙煎しています。フェアトレードなら、高品質なコーヒー豆が日本に届きます。

スローコーヒーのコーヒー豆は、エクアドルやメキシコの深い森の中でバナナやアボカドなどと一緒に育てられています(アグロフォレストリー)。生態系豊かな森の中でコーヒーを育てることが、実は森を守っているのです。そして現地の人たちの収入の向上にもつながります。つまり、環境保護と飢餓対策を両立できる win - win の関係にあるのです。

私たちはフェアトレードの現状の課題についても話を聞きました。それは、フェアトレードが日本であまり普及していないことです。なぜなら、フェアトレードマークをつけるのには多大なコストがかかるからです。例えば、フェアトレードマークをつけるのに現地の人に書類を書いてもらいます。そのために、識字率の低い現地の人に字を教えなければいけません。これによって何度も両国間を行き来しなければいけないので、数十万から数百万円のお金や大変な労力がかかってしまいます。このお話を聞いてこれからのフェアトレードを考えるきっかけになりました。



◇ 私たちの感想

スローコーヒーの方の話を聞いて、これからのフェアトレードについて考えることができました。日本にはまだまだフェアトレードが普及していないので、フェアトレードマークをつけるのにコストがかからないように工夫ができればいいと思います。これからも飢餓をなくせるようにするために、フェアトレードマークのついた商品を買うなど、様々な活動をしていきたいと思いました。

SDGsのロゴより



今回は、2年7組3班による 山形重成さん(農家)へのフィールドワークの報告をします。

◇ 山形さん(農家)を訪問し、農薬を使わない野菜栽培 について学びました!

日時: 2018年8月8日(水) 12:30~13:30
訪問先: 山形重成さん(農家) 岐阜県郡上市鷺見町
内容: 農薬を使わない野菜栽培について
参加者: 林 隼人 平田 聡一郎 小山 花瑠

◇ 農薬を使わない野菜栽培

農薬を使わない栽培方法として、その地域に土着していない天敵を外部から導入し、害虫の発生を永続的に抑制する方法があります。土着天敵とは、その地域の畑や水田の生態系にもともといる生物で、害虫被害を軽減してくれるものをいいます。

アブラムシ→ナナホシテントウ
アザミウマ→タイリクヒメハナカメムシ
ハダニ→ミヤコカブリダニ



- ・ マリーゴールドの独特な匂いによって虫を近づけないようにする。
- ・ 相性の良い野菜と一緒に育てることで病害虫が近づかない。(例 大根と人参)
(チョウなどの虫は卵を産み付けるのに好ましくない野菜があるとわざわざ避けて飛ぶから)
- ・ 光や熱、音など物理的な方法で害虫の被害を減少させる。(粘着リボン)

◇ 私たちの感想

私たちは世界の貧困について研究活動を行ってきました。その中で貧困な国は化学薬品の使用や乱用、長期にわたる過剰な放牧や森林伐採が原因で土壤汚染が進んでいることが分かりました。土壤汚染の原因である化学薬品の中には、農薬も含まれています。

今回のフィールドワークによって相性の良い野菜と一緒に育てることで病害虫が近づかないようにするなど、農薬を使わずに野菜を栽培する工夫について知ることができました。



SDGsのロゴより

今回は、2年7組4班による鉛筆工場フィールドワークの報告をします。

◇愛知県新城市TOMBOW工場を訪問し、鉛筆の製造について学びました！

日 時： 2018年8月1日(水)
訪問先： 愛知県新城市 TOMBOW 工場
内 容： 鉛筆の製造過程について

参加者： 長尾拓真 渡辺隼平 松田清雅 横枕真実 亀山彩花 古田雛子 三浦佳奈

◇鉛筆の製造について

今回私たちは、「すべての子供たちに鉛筆を」というテーマをもとに、発展途上国の子供たちに鉛筆を届けるために鉛筆製造を行っているTOMBOW工場さんを見学させていただきました。鉛筆製造では、管理された木を使用しており、環境に配慮されたエコフレンドリーな鉛筆が製造されています。また、廃棄についても有毒ガスが発生しないよう環境に配慮されています。鉛筆の製造に際して、製造量の1%の廃棄がありますが、その大抵が鉛筆の使用には問題がなく、十分に使えるものが多いとのことでした。しかし、廃棄品を発展途上国の子供たちに送るためには、企業間の連携や、コストの問題がついてまわり、一個人が扱えるものではありませんでした。



◇ 私たちの感想

私たちは、「すべての子供たちに鉛筆を」というテーマで研究活動を行いました。今回のフィールドワークで鉛筆を持っていない子供たちに鉛筆を送るため、TOMBOWさんにいるいろいろな話を伺いました。そこで学んだことは、鉛筆の廃棄が生産量の1%でていることです。そこで廃棄される鉛筆を利用できないかと考えましたが、企業ということもあり、廃棄物を私たちに預けていただくことはできませんでした。しかし、教育が受けられない発展途上国のために、日本で捨てられてしまっている短い鉛筆を学校や地域の人々から集め、送ることが可能だとわかりました。

私たちが考えた方法を実行するために、以下のことを実施したいと思います。発展途上国の子供たちの教育の現状についてポスターを作成し、多くのことについて事実を伝えたいです。そして、鉛筆を送るための資金を募金活動によって集め、少しでも発展途上国の子供たちの学習の手助けとなるように活動していきたいと思っています。



SDGsのロゴより

今回は、2年7組5班による岐阜大学フィールドワークの報告をします。

◇岐阜大学を訪問し、地球温暖化の影響とその対策について学びました！

日時：2018年8月26日(水) 9:00 ~ 11:30

訪問先：岐阜大学 e-plus 生涯学習研究所 代表理事 小林由紀子氏
社会基盤工学科 小林智尚教授

内容：現在の地球の環境問題とそれに対する対策

参加者：清水悠仁 荘加港 吉田太一

◇ 地球の現状と未来、私たちがすべきこと

現在の地球の環境問題には様々なことがあります。例えば、平均気温の上昇、海面上昇、乾燥化、極端な降水の増加などが挙げられます。西日本豪雨では前線の停滞が原因でしたが、このようなことが頻繁に起こるようになる可能性もあるようです。また、それらを含む地球温暖化も大きな問題となっています。100年後には、平均気温は4.8度、海面は85cm上昇すると予想されているというお話も伺うことができました。



そんな中、パリ協定では気温上昇を2度未満にし、今世紀末までに温室効果ガスを0にすることを目標に定めました。また、国連地球サミットやヨハネスブルグサミットでは、「持続可能な開発のための教育(ESD)」の重要性が強調されました。

また、私たちにできることとしては適応策と緩和策の二つが挙げられます。適応策ではハザードマップや気象予報の確認、また高い気温になった時の身の守り方などがあります。緩和策では低炭素エネルギーの使用や森林保全があります。さらに、私たちにできる緩和策には省エネなどがあります。特に省エネでは、古い家電を新しいものに変えることで大きく省エネを進められるという事がわかりました。

この他にも多くのことを今回のフィールドワークで学ぶことができました。

<http://kitchen-car.com/kumiai/s-column/03-109/>

◇ 私たちの感想 ~地球の現状を垣間見て~

私たちは、世界の気候変動の現状と、それに対する具体的な対策をテーマに研究活動を行っています。今回のフィールドワークもその一環として、環境保全の啓発活動を行っている小林由紀子氏や、気象予報の活用などを研究している小林智尚教授の専門的な視点から、ハザードマップなどの適応策や、省エネなどの緩和策の重要性を再認識することができました。

今後は、自分たちが少しでもできる対策に積極的に取り組み、その対策方法を身の回りにも広げていきたいです。



SDGsのロゴより

今回は、2年7組による岐阜県博物館のフィールドワークの報告をします。

◇岐阜県立博物館を訪問し、外来種について学びました！

日時：2018年8月8日(水) 10:30~12:30

訪問先：岐阜県博物館

内容：外来種が与える影響について

参加者：杉山 新 三島 広暉 山田 凌也 清水 万祐子 安田 優香 김찬유
(キム・チャンユ)

◇外来種とは？

外来種とは、もともとはその地にいなかった生き物が人的に運びこまれたもののことであり、外来生物と呼ばれることもあります。

外来種には、特定外来生物という枠があり、外来種の中でも特に固有の生態系に大きな影響を及ぼす可能性があるものを指します。有名な種としてはアライグマや、オオヒキガエル、クビアカツヤカミキリなどがあります。

私たちは、外来種の中で特に興味を持ったイエネコについて調べてきました。イエネコは主に沖縄県に生息しており、穀物には手を出さず、害獣、害虫のみを捕食することから穀物を守る猫は益獣として大切になり、やがて家畜化されました。しかし、在来種も捕食し始めたため問題となりました。

今回は、説田さんに外来種による影響や外来種の種類、代表的な外来種、特定外来種についてなど様々なことを教えていただきました。



◇ 私たちの感想

私たちは、外来生物という言葉しか知らず、その生物がどのような影響を及ぼすかということを知りませんでした。今回のフィールドワークを行ったことにより、外来生物の種類、主にどのような影響を及ぼすのかということを理解することができました。

外来種による問題を解決することはとても難しく簡単なことではないが、そのことについて私たちが考えることは非常に大切だと思いました。外来種の中には人の手によって連れてこられ、役目が終わって野放しにされた動物もいるので、外来種の問題に真剣に取り組むべきだと思いました。



SDGsのロゴより